商品資料館便り

山口大学 YAMAGUCHI UNIVERSITY

第27号
2025年3月31日
発行：山口大学経済学部
商品資料館企画室
山口市吉田 1677-1
(083)933-5500（代表）

東アジア考古学の視点からみる商品資料館

人文学部講師
鈴木　舞

この八月、本学で日韓文化財フォーラムを開催した際、エクスカーション先として商品資料館を訪問させて頂いた。日韓両国から考古学、美術史学、文献史学の研究者が集まり、日本や韓国の陶磁器や新羅の古代土器など各種資料を見学させて頂いた。台風の接近する中、懇切丁寧にご対応下さった商品資料館の皆さまに、この場を借りて御礼申し上げたい。

このフォーラムをきっかけに、商品資料館の方々とのご縁を頂き、その後も本学来訪者のご案内などで見学に伺わせて頂いている。館内では山口高等商業学校に由来する陶製品・金工品・鉱物資源・茶葉・穀物類など、明治・大正期の海外輸出品のサンプルが、近代日本の商品学の研究資料として展示されている。私事で恐縮であるが、私は東アジア考古学、特に古代中国青銅器とその鋳造技術の歴史を専門としている。商品資料館は考古学の視点から見ても、興味の尽きない資料で溢れていた。そのうちの幾つかを、私の所感を交えながら述べていきたい。

一階展示室には、数多くの陶器類が置かれている。日本各地の焼き物もあるし、朝鮮や中国、なかには唐三彩とキャプションの付けられたものもある。いわゆる博物館とは異なり、そのモノが作られた時代や地域には依らず、装飾品・食器・花器・灰皿など用途ごとに分類、展示されていると伺った。花器類の一角には、高麗青磁（高麗：九一八年～一三九二年、朝鮮半島に興った王朝）とされるものもあり、その中には古代中国の玉器「琮」をモチーフにしたものがある（写真一）。琮とは、前三千年紀の中国・長江下流域で栄えた新石器文化のひとつ、良渚文化を代表する玉器である。高麗と同じ頃の中国・北宋王朝（九六〇～一一二七年）では、皇帝を中心に、銅器や玉器など古器物の収集が盛んで、『宣和博古図』『古玉図譜』といった、いわゆる美術品カタログも刊行された。皇帝による展覧会も、周辺諸国を招いて行われていたとされる。良渚文化の玉器・琮は、そうした中で、この時代の器のモチーフとして選ばれたのかもしれない。加えて、こうした背景をもつ本作品には、近世以降の金工技術である金継ぎが施されている。そして近代日本で国際貿易の商品となり、商品学の研究資料となった。その背景には幾重にも重なり合う東アジアの歴史が見て取れるのである。

写真一

さて二階に上がると、まず目に飛び込んでくるのが銅製の花器類である。いずれも明治期のもので、四〇点ほどが展示されている（写真二）。キャプションによれば、約半数は、現在も鋳物の町として知られる富山県高岡の作品である。東アジアにおける金属鋳造技術は、西アジアからの技術伝来後、中国・殷周時代に最盛期を迎え、その後三千年もの間継承されてきた。日本では江戸時代の武家社会の中で、刀剣・仏具・建物金具などを中心に幕府や大名に保護されていた。高岡鋳物師も金沢の前田家の庇護下にあった。明治期になり、武家のみならず、それに支えられていた鋳物師らも職を失う中で、新たに注力したのが花器であった。その技術力は一八七三年のウィーン万国博覧会において世界的に高く評価され、その後輸出品として発展していく。輸出用の超絶技巧を凝らした花器、また別途国内用にも比較的簡素な花器が作られたという。商品資料館に並ぶ銅製花器の多くは、明治三八（一九〇五）～三九（一九〇六）年に京都の内国博覧会や神戸の商品陳列所を経て入手しており、文様の簡素さからも国内向けの商品かもしれない。これらの花器の中には、古代中国青銅器を模した獣面と、日本の伝統文様である青海波を組み合わせた文様も見られる。こうした文様が生まれた背景には、江戸時代～近代の日本に茶道の場を飾る花器として中国古銅器が入ってきたこと、明治期に『泉屋清賞』を始めとする古銅器カタログが刊行されたことが関係しているとされる。本作品にもまた、東アジア四千年の青銅器文化が垣間見られる。

写真二

商品資料館にはこの他にも、和同開珎以来の皇朝十二銭を始めとする日本の歴代銭貨、中国の歴代銭貨や光緒通宝の枝銭（鋳造途中の銭貨）もある。キャプションによれば、中国銭は明治四三（一九一〇）年の収集であり、国内各機関の中国貨幣コレクションと比較すると、かなり早い段階の収集であることが分かる。中国銭だけでも百点近くを所蔵する。また、日本や東アジア各地の鉱物資源、マジョリカ焼やマジョリカタイル（『敷物用床材 日満ゴムタイル見本』（日満護謨工業株式会社）とともに展示）といった焼き物類、アイヌの木彫細工など、東アジアの歴史を語るモノで溢れている。が、紙幅の都合上、ここまでとしたい。

館内の見学を終えて、ガラス扉の外に出ると、いつもの人文学部棟が目の前に見え、「あ…、ここは山口だった…」と、ふと我に返るのである。古代以来の歴史研究に携わる人間からすると、商品資料館は、東アジア四千年の歴史が詰まっている、館内に入った途端に過去の世界にタイムスリップしてしまう、大変魅力的な空間である。私自身また訪れたいと思うし、今後も、本学を訪れてくれた方々をぜひご案内させていただければと思う。

［主要参考文献］高岡市美術館『明治金工の威風―高岡の名品、同時代の名工』二〇一九年、山口大学経済学部『山口大学経済学部商品資料目録（一九八二年）』一九八三年

展示物のご紹介

経済学部長・商品資料館館長
有村　貞則

学部長なので『商品資料館便り』に何か記事を投稿しろとの業務命令が下りました。ですが、私は、商品学の専門家ではないですし、商品資料館に展示されている陶磁器、ガラス類、金属類、紙幣等に特別の関心があるわけでもありません。ですので、何を書くべきか、非常に悩んだのですが、付け焼刃で商品や商品資料館に関連する情報を仕入れて何か記事を書いたとしても、たいしたものにはなりません。そこで開き直ることにしました。何の知識や情報を持たない一市民が商品資料館の展示物を鑑賞し、個人的に面白いと思ったものを幾つか紹介しようと思います。

まずは、写真①に示した米一俵の価格を年ごとに示した表で、天明元年（一七八一年）から昭和六一年（一九八六年）までの価格が示されています。これは、展示物ではないのですが、幾つかの展示物についている当該展示物の当時の価格を現在の金額に直すとどれぐらいになるのかを判断するのに役立ちます。例えば、米一俵は約六〇キログラムです。今年の米一俵の価格が幾らなのかをネットで調べてみると平均で二三三八円となっています。一方で先の価格表をみると明治四〇年の米一俵の価格は六円五九銭となっています。ということは、一円＝一〇〇銭ですので、２３３８８（円）÷６５９（銭）＝３５．４９になり、明治四〇年の一銭は現在の価格に直すと約三五円になります。これを参考に写真②に示した博多人形、これも商品資料館に展示されていたもので明治四〇年七月に一八銭で購入されたものと説明されています。この博多人形を現在の価格に直すと１８（銭）×３５（円）＝６３０（円）となりました。現在、博多人形はとても有名で高価なイメージがあるのですが、当時はここまでなかったのかもしれません。商品資料館の展示物は、こうした当時の商品の価格とその現在価値が分かる点という点に普通の美術館や博物館にはない魅力があります。なお、当時の価格がわからない展示物もありますので、ご留意ください。

写真①

写真②

写真③

写真④

写真③も人形ですが、人形そのものよりも、これを作成したのが島津製作所であることに驚きを覚えました。島津製作所は、ご存じの通り、京都に本社がある精密機器や医療機器、航空機器等を製造する会社です。「あの島津製作所が人形を製作？」、「もしかして違う島津製作所？」と疑問に思ったのですが、調べてみると島津製作所は教育用理化学器機の製造からスタートとした歴史があり、その流れで人体模型を製造、さらにこれが発展してマネキンの生産に乗り出し、最盛期の一九三七年には国内生産マネキンの八五％以上を島津製作所が占めていたそうです。島津製作所の人体模型やマネキン作りは、第二次大戦の戦時色が強まる中で生産・販売が中止となり、戦後も再開されることはありませんでしたが、過去の歴史の中で作成された同社の人形が商品資料館には展示されています。

商品資料館には約一八〇〇点の陶磁器やガラス類が展示されており、河井寛次郎をはじめ有名な陶芸家や産地のものが沢山展示されています。ですが、個人的に面白いと思ったのは写真④の陶器です。このやや大型の陶器、非常にシンプルな形で色も薄茶色のほぼ一色です。ですので、日本か中国の陶器かなと思ったのですが、オランダ焼きというオランダが産地の陶器とのこと。西洋の陶器といえば、非常にカラフルなイメージがあり、実際に商品資料館に展示されているイタリアやイギリス、フランスなど欧州の陶器はカラフルなものばかりですが、このオランダ焼きだけは、まるで日本や東洋の陶器のようです。ネットで調べるとオランダでは一六〇〇年代に中国製の陶器が流入し、非常に人気が出たそうです。このオランダ焼きの説明でも「中国製のものも混じっている」とあるので、中国製の陶器もしくはその影響を受けて、このような色合いになったのかもしれません。

まだまだ紹介したい展示物がありますが、割り当てられた文字数をオーバーしたので、ここで止めたいと思います。なお、特別に許可を得て展示物の写真を撮影し、この記事に載せましたが、商品資料館での写真撮影は禁止となっていますので、ご注意ください。

編集後記

皆さま、明けましておめでとうございます、今年もよろしくお願い致します。

これまでもそうでしたが、今後の商品資料館の維持と発展には、私たち商品資料館企画室のメンバーや経済学部に所属する同僚だけでなく、学内外の各分野において豊富な見識をもつ専門家の力が欠かせません。本号では、人文学部の鈴木先生にご寄稿いただき、おかげさまで読者の皆さまに商品資料館が所蔵する商品資料の魅力を改めて感じていただけるのではないかと思っております。

年末になると、「もう年末？今年は何も残していない！」と感じるのは私だけでしょうか。ただ、一個人として、先人が残した商品資料の偉大さを改めて目の当たりにし、その重みを痛感しています。本号には、商品学の専門家ではない学部長有村先生の文章も掲載しておりますので、ぜひ鈴木先生の寄稿とあわせてお読みいただければ幸いです。（商品資料館企画室長・観光政策学科准教授　袁　麗暉）